ロシア語における
移動によらないトピック構造について

匹田　剛

0．はじめに

ロシア語はいわゆる語順の「自由な」言語である。名詞句の格や動詞の一致などの豊かな形態法の存在によって，英語のような言語と異なり，文法関係に関わる情報の伝達を語順に頼る必要がない。そのため，語順はトピックやフォーカスのようなそれぞれの要素が持つ談話上の機能を表示するために主として利用される。

本稿はロシア語における談話機能要素であるトピックの統語的構造について形式的観点から考察し，それによってそれまで機能主義言語学の中で単一のものとして扱われてきたトピックが少なくとも2種類以上のものに下位分類されるべきであることを示すことを目的とする。

以下第1節では，ロシア語のトピックについて機能主義的に分析する現実的文分節の考え方を概観し，それにはどのような視点が欠けているかを考察する。さらに第2節では形式的な視点からロシア語のトピック構造を考える。

1．現実的文分節

ロシア語におけるトピック，フォーカスなどの談話機能要素の研究はMathesius (1947) から始まり現在までのいわゆる「現実的文分節 (aktuální členění větné, актуальное членение предложения, functional sentence perspective)」の理論に基づくものが主要なものであると言えよう。Mathesius (1947) 自体はチェコ語を主たるターゲットとしており，ロシア語についての言及は全くないものの，ここで展開されている理論をきっかけとして，Ада-

мец (1966), Ковтунова (1976), Крылова и Хавронина (1984) など多くのロシア語に関する研究が現在までになされている。

現実的文分節は形式的文分節 (формальное членение предложения)[1] に対立するものとして捉えられる。形式的文分節のレベルにおいて，文は主語と述語という文法的要素に分析され，これはいわゆる句構造 (phrase structure) に相当する概念であると考えられる。それに対して現実的文分節のレベルにおいて，文はトピック，フォーカス[2] という談話機能要素に分析される。トピックとフォーカスは Mathesius (1947：234) では以下のように機能的に定義づけられている：

> ...základními prvky aktuálního členěni věty jsou východiště výpovědi, to jest to, co je v dané situaci známo nebo alespoň nasnadě a od čeho mluvčí vychází, a jádro výpovědi, to jest to, co mluvčí o východišti výpovědi nebo se zřetelem k němu vypovídá.
>
> 現実的文分節の基本的な要素は，発話の出発点，即ち所与の状況下で既知であるか最大限自明で話者がそこから開始するもの，および発話の核，即ち話者が発話の出発点について，あるいはそれを考慮に入れながら述べるもの，の2点である。

これに加えて「トピックがフォーカスに先行する」という語順の原則を想定し，現実的文分節の違いによって語順の変異を生じさせることで，ロシア

---

[1] この概念に当たる定まった用語は存在しないようである。「形式的文分節」は Mathesius (1947) で用いられているが，他に，「統語的文分節 (синтаксическое членение)，文法的文分節 (грамматическое членение)，統語構造 (синтаксическая структура)」などが見られた。

[2] これらの概念も様々な用語が当てられる，例えば Mathesius (1947) ではそれぞれがテーマ (thema)，レーマ (rhema) が用いられているが，ここではトピックとフォーカスを用いる。他に，トピックは発話の基礎 (основа)，発話の出発点 (исходный пункт, исходная точка)，旧情報 (данное) など，フォーカスはコメント (comment)，発話の核 (ядро)，新情報 (новое) など多様である。考え方によってはこれらの用語を概念的に区別している場合もあるが，本稿は機能的な問題よりも形式的な問題に注目して論を進めるのでとくに区別はしない。

語などの言語のいわゆる「自由な」語順の現象を説明しようとする。例えば，以下の例文はコンテキスト，即ち現実的文分節の違いによって以下のように語順が変化する。(例は Крылова и Хавронина (1984) から)

(1)

(a)—*Кто у вас разводит цветы ?*

「あなた方のところでは誰が花を育てているのですか？」

[TOP Разводит цветы] [FOC отец].
rear-3.sg.pr. flower-pl.acc. father-nom.

「花を育てているのは父です。」

(b)—*Что делает отец ?*

「お父さんは何をしているのですか？」

[TOP Отец] [FOC разводит цветы].
father-nom. rear-3.sg.pr. flower-pl.acc.

「父は花を育てています。」

ここで，(a)と(b)では与えられたコンテキストが異なる。それに従って，(a)では *разводит цветы* がトピックに *отец* がフォーカスになっているのに対して，(b)では逆に *отец* がトピックに *разводит цветы* がフォーカスになっている。そして上述の「トピックがフォーカスに先行する」という原則によって語順が逆転していることが説明されるのである[3]。

概略，このようにロシア語のような「自由な語順」の言語における語順の変異を説明する現実的文分節の理論であるが[4]，本稿ではこの理論が持つ以下

---

[3] ただし，ロシア語において「トピックがフォーカスに先行する」という語順の原則が必ずしも当てはまるわけではない。例えば，Крылова и Хавронина (1984) は，このような語順を「表出的に色づけられていないことば (экспрессивно не окрашенная речь)」に特徴的な「客観的 (объективный)」な語順と呼び，この原則に従わない場合を「表出的に色づけられたことば (экспрессивно окрашенная речь)」に見られる「主観的 (субъективный)」な語順としている。

[4] 英語のような語順が文法的に厳しく制限されている言語において，語順を「自由に」動かすことによって現実的文分節を表現することは難しくなる。かといってそのことが英語などで語順がこの機能を全く持ち得ないと言うことにはならな

の各特徴に着目しながら論を進めていく。

第一点目は，現実的文分節の理論はロシア語などの「自由な語順」の言語について，その語順の変異に理由付け・説明を試みようとするものであるということである。このことは例えば，以下のような議論に見て取れる。

Ковтунова (1976：24)

В. Матезиус тесно связал актуальное членение с главным средством его выражения—порядком слов. Важная роль актуального членения в расположении слов характерна в основном для языков с подвижным порядком слов.

V. マテジウスは現実的文分節をその最大の表現手段，即ち語順と結びつけた。語の配列において現実的文分節が果たす重要な役割は基本的に自由な語順を持つ言語にとって特徴的なものである。

Адамец (1966：10)

Главная роль порядка слов в современном русском языке—это выражение актуального членения предложения. Место отдельных компонентов в предложении точно определяет ... функции этих компонентов с точки зрения актуального членения и коммуникативное назначение целого предложения.

現代ロシア語における語順の主たる役割は現実的文分節の表現である。文中の個々の構成要素の位置は現実的文分節から見たそれらの要素の機能と文全体のコミュニケーションの意図を正確に決定する。

Daneš (1972：221)（括弧内は匹田による補足）

It is evident that in languages with the so-called 'free' order, ...the order of the sentence components may, in concrete utterances, be

---

い。例えば，Адамец (1966) では現実的文分節の違いを表現するために受動文や分裂文 (cleft sentence) を作ることによって語順を変える場合があることが指摘されている。

employed for the purpose of signalling the T(opic) — C(omment) bipartition. This is the case, e.g. of Russian.

いわゆる「自由な」語順の言語において，文の構成要素の配列順序は，具体的な発話において，トピック—コメントの区別を示すために用いられうる。これは例えばロシア語においてそうである。

二点目は，現実的文分節において文はトピックが存在しない場合をのぞきトピックとフォーカスに2分割され，全てのトピックとフォーカスは同種のものと見なされるという点である。例えば，以下の例でКрылова и Хавронина (1984)は次のように分析しているが，いずれの例のトピックとフォーカスを同様のものであると扱っており，とくにそれらが異なる性質を持つとは考えていない。

(2)

(a) [TOP Дети] [FOC играют].
child-pl.nom. play-3.pl.pr.
「子供たちは遊んでいる。」

(b) [TOP Сомнения] [FOC рассеялись].
doubt-pl.nom. vanish-pl.pa.
「疑いは晴れた。」

(c) [TOP Москва] [FOC столица СССР].
Moscow-nom. capital-nom. USSR-gen.
「モスクワはソ連の首都である。」

(d) [TOP Это] [FOC мое письмо].
this-nom. my letter-nom.
「これは私の手紙である。」

そして3点目はプラーグ学派の中から生まれたこの理論は，言語の機能に主たる関心があり，形式面には大きな関心を寄せることがないと言うことである。とくに，形式面の議論になるとその記述方法はもっぱら分類論的なものになりがちで，言語の統語論における表面に見えない隠された規則性を探り出そうという考えはほとんど見られないと言って良い。

以下，第2節ではこれら3点とはあえて異なる立場をとることによってロシア語のトピック構造について考えていく。

2．形式的側面から見たロシア語のトピック

本節ではロシア語のトピック構造について考察を加えるが，その際，前節で触れた現実的文分節理論の観点とは異なる見地から分析を行う。即ち，形式的な観点から考察することによって，ロシア語には現実的文分節に従って移動することによって「自由な語順」を生み出すトピック構造と，形式的文分節によって示されるトピック構造の両者が存在することを議論する。

2.1．かき混ぜ

前節で現実的文分節の理論はロシア語のような言語において語順が自由に動くことを説明づけようとしていることを述べた。これは例えば，以下のような3つの要素からなる文が実際には3×2×1＝6通りの語順があることを機能的に説明しようとするものである。

(3)

(a) Иван читает книгу.
Ivan-nom. read-3sg.pr. book-acc.
「イワンは本を読んでいる。」

(b) Иван книгу читает.

(c) Читает Иван книгу.

(d) Читает книгу Иван.

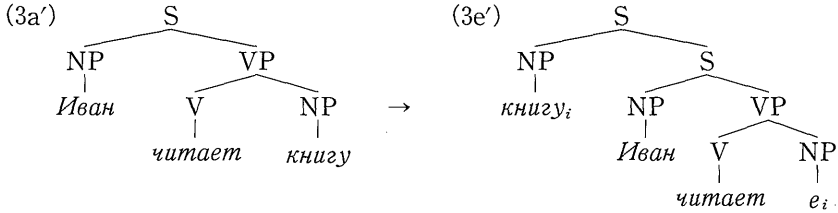
(e) Книгу Иван читает.

(f) Книгу читает Иван.

以下，本稿ではこのような「自由な語順」の現象を「かき混ぜ」と呼ぶ。

形式的観点から，匹田（1993）はかき混ぜは節点Sへのチョムスキー付加（Chomsky-adjunction）という移動規則を設定することによって説明されるとした。Исаченко（1966）等に示されているように，ロシア語は基底部での

語順はSVOと広く考えられているが[5]，この移動規則によってかき混ぜによる語順の変異を生成することができる。例えば，基底語順(3a)から(3e)の変異を作る場合，以下のように移動が行われ構造が変化する。



匹田（1993）ではこのような形で規則を定式化した根拠として概略以下のような議論を示した：

かき混ぜの現象を説明する際に論理的には次の3つの可能性があると考えられる。(ⅰ)文頭に置かれる要素は移動によらず基底部で生成されている；(ⅱ)あらかじめ基底部で用意された節点への移動；(ⅲ)付加による移動。

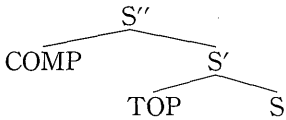
(ⅰ)の場合は最初から基底部で文頭の位置に生成するのでそれを保証するためには句構造規則によって何らかの節点を用意しなければならない。それは例えば以下のようなものが考えられる：

(4)　S″ → COMP S′

　　S′ → TOP S

このような規則を仮定すると次のような構造が生成される：

(4′)

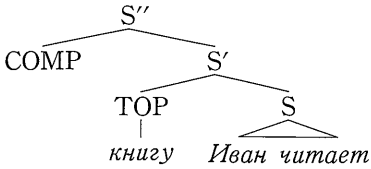


例えば，上で(3e)とした例文はこの分析に従えば，以下のような構造を基

[5] 類型論の立場からも基本語順は一般にSVOであると考えられている。例えば，松本（1987）を参照。

底部で与えられることになる：

(5)



英語に関して，Chomsky (1977) 等はまさにこの考え方を採用しているが，ロシア語のかき混ぜによるトピックに対してこの考え方をとるのには記述上問題がある。

Ковтунова (1976) が示すように，ロシア語には1文の中に複数のトピックが現れうる。例えば，以下の(b)の文は少なくとも2つのトピックが観察される[6]。

(6)

(a) Наташа продавала ему книгу.
Nataša-nom. sell-f.pa. him-dat. book-acc.
「ナターシャは彼に本を売った。」

(b) [тор Книгу] [тор ему] Наташа продавала.

このように複数のトピックが可能であるロシア語においては，基底部でトピックを生成しようとすると，その都度必要な数の節点を作らなければならない。論理上は無限にトピックが文頭に現れうるロシア語において，これは事実上不可能である。このような考え方が Chomsky (1977) において可能であるとされているのは英語にはこのようなトピックが1つに限定されている

[6] もちろん，コンテキストがなければどの部分がトピックかどうかは断定できない。ここで「少なくとも2つ」と述べたのはそう考えないと基本語順とのズレが説明つかないからである。ちなみに，(a)の文は対応する基本語順の文である。ただし，与格の間接目的語と対格の直接目的語のどちらが基本語順では先に来るかという問題には慎重な議論が必要である。例えば，Исаченко (1966) は両者ともあり得るとしている。

からである。また，上述(ii)の「あらかじめ用意された節点への移動」という分析も全く同じ理由で不可能になり，可能なものは(iii)の「付加による移動」のみと言うことになる。

付加であるとすると，先ず第一に考えなければならないことはトピックの句構造上の位置である。以下の例をご覧いただきたい：

(7)

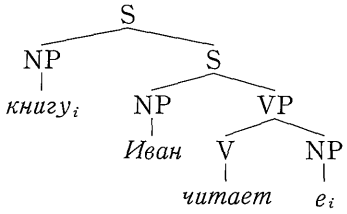
(a) Я　сказал,　что Коля ненавидит　Петю.
I-nom. say-m.pa. that Kolja hate-3.sg.pr. Petja-acc.
「私はコーリャがペーチャを憎んでいると言った。」

(b) Я сказал, что Петю Коля ненавидит.

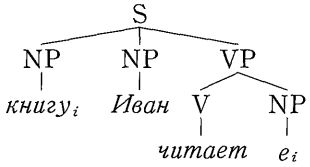
ここ(7b)では従属節の対格目的語である *Петю* がトピックとして，従属接続詞 *что* の直後の位置に置かれている。このように，一般にロシア語の従属節中のトピックはCOMPの直後に置かれ，COMPを越えることができない(Hikita 1992)。そのことはここでトピックがCOMPの下，Sの左側に付加されていることを意味している。

次に問題になるのは，付加による移動であるのであればその付加はチョムスキー付加 (Chomsky-adjunction) なのかそれとも姉妹付加 (sister-adjunction)なのかという点である。もし，この移動がチョムスキー付加であると考えれば上述(3e)の構造は(8)のように，姉妹付加ならば(9)のようになる。

(8)



(9)



これらの分析のどちらが正しいかについて，まず第一に生成文法の束縛理論の観点から検討する。束縛理論は以下のようなものである：

(10) 束縛理論

a）照応形はその統率範疇内で束縛される。

b）代名詞類はその統率範疇内で自由である。

c）指示表現は自由である。

この理論がロシア語で正しく機能しているかを以下の例文で先ず見てみよう。

(11) *Иван$_i$ любит его$_i$.
Ivan-nom. love-3.sg.pr. he-acc.
「*イワン$_i$は彼$_i$を愛している。」

(12) Витя$_i$ еще не прочитал письмо, которое Таня
Vitja-nom. still not read-m.pa. letter-acc. which-acc. Tanja-nom.
прислала ему$_i$.
send-f. pa. he-dat.
「ビーチャはターニャが彼に送った手紙をまだ読んでいない。」

(13) *Он$_i$ еще не прочитал письмо, которое Таня
he-nom. still not read-m.pa. letter-acc. which-acc. Tanja-nom.
прислала Вите$_i$.
send-f.pa. Vitja-dat.
「*彼$_i$はターニャがビーチャ$_i$に送った手紙をまだ読んでいない。」

例文(11)では先行詞 *Иван* が代名詞 *его* をその統率範疇内で束縛しているので非文となっている。(12)では先行詞 *Витя* が代名詞 *ему* を束縛しているが，それは統率範疇の外部にあるので結果として適格文となる。(13)では代名詞 *он* が指示表現 *Вите* を，統率範疇の外ではあるものの，束縛しているので非文となっている。以上のように，ロシア語において束縛理論は正しく現実を予測していると考えられる。

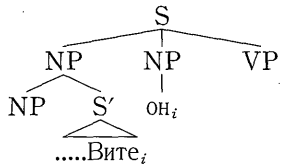
次に，かき混ぜの問題を考えるために，以下の例をご覧いただきたい。

(14) Письмо, которое Таня прислала ему$_i$, Витя$_i$
letter-acc. which-acc. Tanja-nom. send-f.pa. he-dat. Vitja-nom.
еще не прочитал.
still not read-m.pa.
「ターニャが彼$_i$に送った手紙をビーチャ$_i$はまだ読んでいない。」

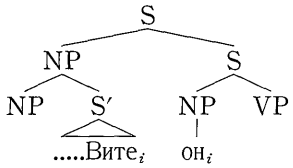
(15) Письмо, которое Таня прислала Вите$_i$, он$_i$
letter-acc. which-acc. Tanja-nom. send-f.pa. Vitja-dat. he-nom.
еще не прочитал.
still not read-m.pa.
「ターニャがビーチャ$_i$に送った手紙を彼$_i$はまだ読んでいない。」

ここで(14)は上の(12)の，(15)は(13)の，それぞれ目的語部分が文頭に移動しているものであるが，ご覧の通りそれだけで文法性の判断に違いが生じている。このうち，(14)に関しては姉妹付加とチョムスキー付加のどちらでも束縛理論に違反することはないため(14)を見ただけでどちらの分析が正しいかの判断はできない。しかし，(15)は姉妹付加と分析する場合とチョムスキー付加と考えた場合では束縛理論によって文法性について異なる予測がなされる。(15′)は姉妹付加の場合，(15″)はチョムスキー付加と分析した場合に考えられる構造である。

(15′)



(15″)



姉妹付加の場合(15′)では代名詞 *он* が指示表現 *Bume* を，統率範疇の外からではあるが，束縛している。従って，束縛理論はこの文を非文と判断することになる。それに対してチョムスキー付加の場合(15″)では指示代名詞 *Bume* が代名詞 *он* に束縛されず，また代名詞が先行詞である指示表現に束縛されることもない。このことから，束縛理論に従って(15)が適格であることを正しく予測しているのはチョムスキー付加の分析であり，ロシア語のト

ピックの移動はSへのチョムスキー付加であると考えるべきであることがわかる。

次に機能主義の観点からこの問題を考察する。Ковтунова (1976：53) は以下のように複数のトピックの「階層性」について述べている。

> При наличии нескольких тем актуальное членение может носить ступенчатный характер. Это значит, что первая тема относится к остальной части предложения как к реме, рема же в свою очередь членится на вторую тему и рему и т.д. до последней ремы, или собственно ремы.
>
> いくつかのテーマが存在する場合，現実的文分節は階層的な特徴を有することがある。即ち，最初のテーマは文の残りの部分にレーマとして関係し，次にそのレーマは第2のテーマとレーマに分析され…と最後のレーマ，あるいは本来のレーマまで続く。

例えば，以下の例では複数のトピックが存在している。

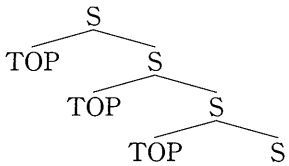
(16) [TOP Больше] [TOP мы] [TOP вам] не верим.
more we-nom. you-dat. not believe-1.pl.pr.

「これ以上我々はあなたを信じない。」

ここで，最初のトピックである *Больше* は文の残り全て，即ち *мы вам не верим* に対するトピックとして機能しており，2番目のトピック *мы* は *вам не верим* の，3番目の *вам* は *не верим* に対するトピックとして機能していると考えられるわけである。

このことはトピックの移動がSへのチョムスキー付加であるという考え方を機能主義の立場から支えるものであるといえよう。この移動がSへのチョムスキー付加であるということは複数のトピックを持つ場合，以下のような構造を持つことを意味する。

(17)



この「階層的」な構造はまさに形式的な構造が機能的な関係と一致していることが見て取れる。そして，この点からもトピックの移動がSへのチョムスキー付加であるとの議論が正しいと考えられるのである。

2.2. 移動によらないトピック～現実的文分節と形式的文分節の一致

前節2.1.では現実的文分節理論によって説明されるロシア語における「自由な」語順の変異，即ちかき混ぜを形式的な観点から見た。以下本節ではロシア語のトピックを形式的な視点からさらに観察することによって，2.1.で見たような「自由な語順を説明するための」かき混ぜによるトピック構造以外にも，「自由な語順」とは関係のない基底部で定まった位置に生成される，いわば本来的に形式的文分節が現実的文分節に一致しているトピック構造が少なくともここで示す3種があることを論じる。

2.2.1. 左方転移要素

匹田（1993）ではかき混ぜの他に左方転移要素（left-dislocated phrase）についても議論を行っている。左方転移要素とは例えば以下のようなものである。

(18) Мария$_i$ — я ее$_i$ люблю.
Marija-nom. I-nom. it-acc. love-1.sg.pr.
「マリヤは私が愛している。」

(19) Книга о русской грамматике$_i$ — Виноградов ее$_i$
book-nom. on Russian grammar Vinogradov-nom. it-acc.
написал в 1947 году.
write-m.pa. in year
「ロシア語文法に関する本はヴィノグラードフは1947年に書き上げた。」

これらの例で，(18)では *Мария* が，(19)では *Книга о русской грамматике* が，それぞれ左方転移要素である。左方転移要素は文頭にトピックとして現れる点は前節で扱ったかき混ぜによるトピックと同様であるが，必ず主格で現れ，それと同一指示の代名詞が文中の統語的必要性に応じた格を与え

られて現れる点はかき混ぜの場合と異なっている。

このロシア語の左方転移要素はかき混ぜによるトピックと異なり，移動によって文頭に移動したものではなく，基底部で文頭に生成されたものであると考えられる。以下，匹田（1993）に従って根拠の概略を示すこととする。

第1点目は格を巡る問題である。

(20)（＝18） Мария$_i$ — я ее$_i$ люблю.
Marija-nom. I-nom. it-acc. love-1.sg.pr.
「マリヤは私が愛している。」

ここで，左方転移要素 *Мария* は主格を与えられており，同一指示の代名詞は他動詞の直接目的語として対格を与えられている。仮に左方転移要素が移動により文頭の位置に置かれていると考えるのなら，*Мария* はそれと同一指示の代名詞 *ее* の位置から移動してきたもので，*ее* はその痕跡が具現化したものであると考えられよう。

Chomsky（1986）は1つのCHAINは1つの格のみを付与されるという一般原則を提案している。しかしこの場合，もし左方転移要素が移動によって生じたものであると考えると，左方転移要素 *Мария* 及びそれとCHAINを形成する痕跡 *ее* はそれぞれ主格と対格という異なる格を持つことになり，1つのCHAINが2つの格を持つことになる。従って，生成文法の一般理論の観点から見て，左方転移要素を移動によるものと考えることはできないことになる。

2点目に考える点は従属節からの外置に関する問題である。

(21) Телевизоры$_i$ — я знаю, что в этом магазине
television-pl.nom. I-nom. know-1.sg.pr. that in this shop-loc.
их$_i$ много.
they-gen. many (Comrie 1973)
「テレビはこの店にたくさんあることを私は知っている。」

この例において，左方転移要素 *Телевизоры* は従属節中の代名詞 *их* と関係づけられている。これに関連してHikita（1992）は以下のような例を示した。

(22)

(a) Наташа сказала, что Таня читает книгу.
Nataša-nom. say-f.pa. that Tanja read-3.sg.pr. book-acc.
「ナターシャはターニャは本を読んでいると言った。」

(b) *Книгу$_i$ Наташа сказала, что Таня читает e_i.

この例文(b)は前節で論じたかき混ぜによって，従属節から対格目的語*книгу*を外置したものであるが，これから明らかなように一般にロシア語では時制を持つ従属節からの要素の外置は不可能である。それに対して，(21)に見たように左方転移要素は従属節の外部から内部の要素と関係づけられることが可能である。このことからも左方転移要素は移動によらず，基底部で生成されたものであることがわかる。

Comrie (1973) がこの点に関して興味深い例を紹介している。

(23) Телевизоров$_i$ — в этом магазине их$_i$ много.
television-pl.gen. in this shop-loc. they-gen. many
「テレビはこの見せにたくさんある。」

通常の左方転移要素が主格で現れているのに対して，この例では文中の同一指示の代名詞と同じ格，即ちここでは生格，で現れている。匹田による調査ではこのような例は全て非文との判断を頂戴したものの，Comrie (1973) はこのように左方転移要素が主格で現れない例も可能であるとしている。このような例が興味深い理由は Comrie (1973) が示すもう一つの例にある。

(24) *Телевизоров$_i$ — я знаю, что в этом магазине
television-pl.gen. I-nom. know-1.sg.pr. that in this shop-loc.
их$_i$ много.
they-gen. many
「テレビはこの店にたくさんあることを私は知っている。」

上で，左方転移要素は主格という文中の代名詞要素と異なる格が付与され，仮に文頭に移動したものであると考えると1つの CHAIN に2つの異なる格が与えられることになってしまうので，左方転移要素を移動によるものと考えることができないと論じた。しかしこの場合，同じ格を与えられているわけであるから移動と分析される可能性が生じるわけである。そして，(24)

の例に見るようにこのような場合は従属節内部の要素と関係づけることができない。このことは移動が従属節から要素を外置する事ができないと言うHikita (1992) で示したロシア語における一般的な原則に合致するのである。Comrie 1973) の報告は左方転移要素の性質を考える上で興味深い示唆を与えるものである。

次に考えるのは前置詞句からの外置である。

(25) Татьяна Михайловна$_i$ — все о ней$_i$ хорошо знают.
Tat'jana Mixajlovna everyone about her well know-3.pl.pr.
「タチヤナ・ミハイロヴナについてはみんなよく知っている。」

ここで，左方転移要素 *Татьяна Михайловна* は前置詞の目的語と関係づけられている。即ち，もし移動によるのであれば，ここでは前置詞句から目的語名詞句のみの外置が生じていることになる。しかし，Hikita (1992) では以下のような例を示すことにより前置詞句からの移動による要素の外置は必ず前置詞を伴わなければならないことを明らかにした。

(26)

(a) Он живет [PP с красивой женщиной].
he-nom. love-3.sg.pr. with beautiful woman
「彼は美しい女性と暮らしている。」

(b) *Красивой$_j$ он живет [PP с e_i женщиной].

(c) *Женщиной$_i$ он живет [PP с красивой e_i].

(d) C$_i$ красивой$_i$ он живет [PP e_i e_j женщиной].

(e) C$_i$ женщиной$_j$ он живет [PP e_i красивой e_j].

この点でも左方転移要素は移動によらないと考えられる。

さらに，次のような点にも注目すべきであろう。左方転移要素はかき混ぜの場合と異なり，2つの要素がトピックとして文頭に現れることができない。

(27) *Валера$_i$ Эмма$_j$ — он$_i$ ее$_j$ любит.
Valera-nom. Emma-nom. he-nom. she-acc. love-3.sg.pr.
「ワレーラはエンマを愛している。」

かき混ぜの性質を議論した際，複数のトピックが可能であることをそれが

移動であることの根拠としたが，左方転移要素は逆に1つのみしか許されない。このことは左方転移要素が移動によらないことを間接的に支えるものであると考えるべきであろう。

また，Земская (1973) には以下のような興味深い例が報告されている。

(28) Сестра$_i$ — сестре$_i$ написал муж.
sister-nom. sister-dat. write-m.pa. husband-nom.
「姉には夫が手紙を書いた。」

(29) *Ты обедай один.* 「あなたは昼食は一人でとりなさい。」
А чай — подожди меня.
but tea-nom. wait-imp. I-acc.
「でもお茶は私を待っていなさい。」

(28)では左方転移要素と同一指示の文中で与格を与えられた要素が代名詞ではなく普通名詞になっている。また(29)では文中に左方転移要素と同一指示になる要素そのものが存在していない。これらの例は移動であるとすると全く説明が付かなくなる。これらの点からも左方転移要素は移動によらず基底部で生成されたものであると考えるべきであろう。

2.2.2. いわゆる連結動詞構文

ロシア語にはいわゆる連結動詞として *быть* があるが，これには主格主語と主格述語を連結する場合(30)と主格主語と造格述語を連結する場合(31)の2通りがあるとされる[7]。

(30) Я ϕ студент.
I-nom. be-pr. student-nom.
「私は学生だ。」

(31) Таня была студенткой.
Tanja-nom. be-f.pa. student-ins.

---

[7] 現在時制の場合，*быть* は通常 ϕ になるが，*есть* という明示的な形式が現れることもある。ただし，その場合ロシア語の他の動詞と異なり人称・性・数などで屈折することは一切ない。*быть* のもつ形態的な特殊性については匹田(1998)を参照。

「ターニャは学生だった。」

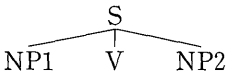
歴史的には従来述語名詞句は主格が特徴的であったが，現代への言語変化の中で造格への移行が起こりつつある（Виноградов 1960, Иванов 1983, Ковалевская 1992, Comrie et al 1996）。しかし現在時制の場合のみ造格は現代でも認められない。ちなみに匹田が協力者の方に対して行った調査では現在時制以外の場合ではもっぱら造格述語のみが認められ，それが文法書などに可能な文として記載されている例文そのままであってもごくわずかな例外を除き主格述語は非文として排除された。その一方，現在時制の場合，主格以外は完全に非文との判断が下された。

匹田（1999）はこの述語名詞句の格の問題を含め *быть* の現在時制がもつ様々な特殊性を概観した。以下，匹田（1999）に従って現在時制の主格述語を持つ構文の統語的特殊性を概観し，ここで見られる「主語」と「述語」はしばしば考えられているような主語と述語の関係にはなく，トピックとフォーカスの関係にあり，その「主語」は前節で考察を加えた左方転移要素と同様に移動によらず，基底部で当初からトピックとして生成された本来的なトピックであると結論づける。なお，以下いわゆる「主語」を「第1名詞句」，「述語」を「第2名詞句」と呼ぶ。

2.2.2.1. 格付与

第1名詞句と第2名詞句の両者に主格が与えられている場合，当然その格付与がどのように行われているのかという問題が生じる。いわゆるGB理論のChomsky（1981）やMinimalist ProgramのChomsky（1993，1995）などではいずれの理論体系でも主格の付与と動詞の一致を単一の操作で説明しようとしているが，このように主格名詞句が複数存在する場合，この方法ではうまく説明が付かない。Babby（1980，1986）は *быть* の第1名詞句と第2名詞句の両者に主格を付与するために以下のような構造と主格付与規則を提案した。

(32)



(Babby 1980: 171-172)[8]

(33) A noun phrase that is not governed by a lexical cateogory is assigned the nominative case. (Babby 1986:180)[9]

このような考え方をするための詳細な議論は匹田（1995，1998）等にあるが，(32，33)を想定することによって主格の付与の説明が付くのは，このような быть の構文の2つの主格名詞句の他，「呼格」名詞句，引用形，左方転移要素など，様々なものがある。

2.2.2.2. 2つの主格名詞句の関係

さて，(32)のような構造を想定すると一つの疑問が生じる。このように第1名詞句と第2名詞句が姉妹の関係にあるとすれば，それら2つの名詞句の違いは何なのであろうか。形態的にはどちらも主格であり，また統語構造上も語順以外は同じ位置にあるのでいずれも区別がない。ここではこれら2つの名詞句の関係を探っていく。

まず以下の例を見ていただきたい。

(34)

(a) Высоцкий　ϕ　хороший　певец.
Vysockij-nom. be-pr. good-nom. singer-nom.
「ヴィソツキーは良い歌手だ。」

(b) Хороший певец ϕ Высоцкий.
「良い歌手はヴィソツキーだ。」

---

[8] ただし，Babby (1980) はこのような構造を示す際，〝something like this〟「何かこのようなもの」という表現を用い，慎重に断言を避けている。

[9] 匹田（1998）はこれに改訂を加えて以下のような規則を提案した：
「いかなる語彙範疇にも統率されない名詞句は INFL [-finite] に統率されない限り，主格を付与される。」
これは Babby (1986) では説明の付かない若干の点を説明づけるための改訂であるが，本稿での議論とは無関係なので詳しくは匹田（1998）を参照。

これらはいずれも2つの名詞句が主格を与えられており，違いは語順，即ち2つの名詞句の位置が逆転している点のみである。この語順の逆転がなぜ生じているのかについて先ず考えられる理由は2点ある。

1点目は上で触れたかき混ぜによる語順の変化である。

(34′)　かき混ぜによる語順の逆転

(a)　[SUBJ. Высоцкий]　ϕ　[PRED. хороший певец].
↓かき混ぜ

(b)　[PRED. Хороший певец]　ϕ　[SUBJ. Высоцкий].

そして2点目はКохтев и Розенталь (1984) に見られる解釈で，主語と述語が交代していると見る考え方である。そこではいずれの例においても2つの名詞句の1つ目が主語で2つ目が述語であると考え，語順の変異は主語と述語の交代によって起こっていると考える。

(34″)　主語と述語の交代

(a)　[SUBJ. Высоцкий]　ϕ　[PRED. хороший певец].

(b)　[SUBJ. Хороший певец]　ϕ　[PRED. Высоцкий].

2つの分析の可能性を考えるために，第2名詞句に造格が与えられている他の時制の例を見てみよう。

(35)

(a)　Высоцкий　был　хорошим　певцом.
Vysockij-nom. be-m.pa. good-ins. singer-ins.
「ヴィソツキーは良い歌手だった。」

(b)　Хорошим певцом был Высоцкий.

この場合，第2名詞句は主格ではなく造格を与えられており，主格の第1名詞句とは形態上の区別がなされており，どちらが主語でどちらが述語かは明らかである。従って，語順が逆転していても *хорошим певцом* が述語であることは明白であり，語順の逆転はかき混ぜの結果によるものであることが明らかである。しかし，(34)の例では2つの名詞句とも主格を与えられているため主語と述語を形態上区別することができない。それ故，2つの分析が

可能になるわけである。

かき混ぜとは上で述べた通り「自由な語順」を説明するための概念である。上の(3)で示したようにロシア語では例えば3つの要素があれば6通りの語順が可能になる。つまり，かき混ぜであるのであれば全ての語順が可能であるという予測がなされる。ところが，第2名詞句が主格を与えられている現在時制の文の場合，造格の場合と異なり語順に厳しい制限がかかっている[10]。

(36)

(a) Ваня есть студент.
Vanja-nom. be-pr. student-nom.
「ワーニャは学生だ。」

(b) Студент есть Ваня.

(c) *Студент Ваня есть.

(37)

(a) Ваня был студентом.
Vanja-nom. be-m.pa. student-ins.
「ワーニャは学生だった。」

(b) Студентом был Ваня.

(c) Студентом Ваня был.

このような違いを見ると，(34)のような第2名詞句に主格が与えられている場合の語順の変異は造格が与えられている場合と異なりかき混ぜによって生じているものではないことがわかる。

では第2の可能性，即ちКохтев и Розенталь (1984) によるような主語と述語が交代しているとするのが正しい分析と考えるべきなのであろうか。しかし，この分析にも問題がある。

---

10 ここで *быть* の現在形を ϕ にすると語順の変異が見えなくなってしまうので，明示的な形式 *есть* を用いる。ϕ と *есть* の違いについては様々な文献で文体的な差異があることが指摘されている。しかし，文法的な差異については現在の時点では調査の中で全く確認されていない。これが本当に全く差がないのか確認することは今後の課題の一つであることは言うまでもない。

(38)

(a) Высоцкий был хорошим певцом.
Vysotsky-nom. be-m.pa. good-ins. singer-ins.
「ヴィソツキーは良い歌手だった。」

(b) *Хороший певец был Высоцким.
good-nom. singer-nom. be-m.pa. Vysotsky-ins.

これは過去時制で述語名詞句に造格が付与されている例であるが，(b)の文では語順が逆転しているだけではなく格付与も変化している。即ち主語と述語が交代しているわけであるが，これは非文であり，主語と述語の交代は不可能であることがある。このことから(34)の語順の変異は主語と述語の交代によるものであるとの分析も否定される。

ここまで(34)の語順の変異はかき混ぜによるものでも主語と述語の交代によるものでもないと考えられることを見た。このことから(34)の第1名詞句と第2名詞句の間には，少なくとも(35)に見られるような「主述関係」とは違った関係が存在することが推測される。

ここで考えられるのは，上で議論した左方転移要素と同様の，移動によらず基底部で句構造によって表現されたトピック・フォーカスの関係がここにも見られると言うことである。つまり，(34)等の例において主語・述語のような文法的な関係は最初から存在せず，あるのは談話機能的な関係のみである。そう考えることによってかき混ぜによって要素を移動させ新たな談話機能を付加できないことが説明されるし，また(35)に見られるような主語と述語という関係ではないので第1名詞句と第2名詞句が交代できることも説明が付く。

「現在形の *быть*＋主格名詞句」を含む等位接続構造がこの考え方をめぐって興味深い性質を示している。以下は通常の動詞＋XP と *быть*＋NP を等位接続させた例である。

(39) *Он говорит по-русски, и есть переводчик.
he-nom. speak-3.sg.pr. in Russian and be-pr. interpreter-nom.
「彼はロシア語を話し，通訳である。」

(40) Таня жила в Москве, и была студенткой.
Tanja-nom. live-f.pa. in Moscow and be-f.pa. student-ins.
「ターニャはモスクワに暮らしていた。そして学生だった。」

(41) Он есть переводчик, и говорит по-русски.
he-nom. be-pr. interpreter-nom. and speak-3.sg.pr. in Russian
「彼は通訳でロシア語を話す。」

(42) Таня была студенткой, и жила в Москве.
Tanja-nom. be-f.pa. student-ins. and live-f.pa. in Moscow
「ターニャは学生だった。そしてモスクワに住んでいた。」

また以下は *быть* の現在形＋主格名詞句を *быть* の他の時制＋造格名詞句と等位接続させた例である。

(43) *Он был студентом, и есть студент.
he-nom. be-m.pa. student-ins. and be-pr. student-nom.
「彼は学生だった。そして学生である。」

(44) Он есть студент, и был студентом.
he-nom. be-pr. student-nom. and be-m.pa. student-ins.
「彼は学生で，そして学生だった。」

これらの例から *быть* の現在形＋主格名詞句は等位接続する場合，第1要素となることはできても第2要素となることはできないように見える。しかし，事実はもう少し複雑である。例えば，たとえ第2要素となっていても以下のような例は可能である。

(45) Он говорит по-русски, и он есть
he-nom. speak-3.sg.pr. in Russian and he-nom. be-pr.
переводчик.
interpreter-nom.
「彼はロシア語を話す。そして彼は通訳である。」

即ち，等位接続の第2要素であってもそこに第1名詞句があれば適格文となるわけである。さらに，次の例に注目しなければならない。

(46) Он был студентом, и сейчас ϕ студент.
he-nom. be-pa. student-in. and now be-pr. student-nom.
「彼は学生だった。そして今学生である。」

この例(46)は上で非文とされた(43)に非常によく似ているが *сейчас*「今」

という副詞がトピックとして入り込んでいる点だけが異なっている。ここから明らかなことは現在形の *быть*＋主格名詞句からなる範疇には必要なのは「主語」ではなく離れていない位置にあるトピックであるということである。そして，それは *сейчас* が可能であることから明らかなように名詞句である必要すらない。このことからも「主格名詞句＋*быть*＋主格名詞句」の構文において2つの名詞句の関係は主語・述語という文法的な関係ではなくトピックとフォーカスの関係であることが見て取れる。そして，ここにも左方転移要素のように移動によらず形式的に基底部の句構造で生み出されたトピックが見られると考えられる。

2.2.3. это

ロシア語には山崎（1990）が「形式題」と呼ぶ要素がある。それは形態的には指示代名詞 *этот*「この，その」の中性・主格形である *это* であらわれ，統語的には文頭に現れ完全な文を先導する。そして機能的にはトピックとして機能し，先導する文のうち *это* の直後に来るものがフォーカスとしてある種の強調構文として用いられるものである[11]。

(47) Это птицы летят.
this-n.nom. bird-pl.nom. fly-3.pl.pr.
「それは鳥が飛んでいるのだ。」

ここで，*это* に先導されている *птицы летят* は主格主語＋自動詞という完全な文の形式を有している。そして，後続部が全てが完全にそろった文である以上 *это* は移動によってこの位置に生じたものであると考えることはできない。移動したからには後続部に何かが欠けていなければならないからである。つまり，この形式題の *это* も前節までに見た左方転移要素や第2名

---

[11] 大まかな言い方をすれば英語の以下のような分裂構文（cleft sentence）に似た働きをするものであると考えれば良いかも知れない。
It was a car that he bought yesterday.
「彼が昨日買ったのは車だった。」

詞句が主格を有しているいわゆる連結動詞構文における第1名詞句のように移動によらず，「自由な語順」とは関係のない基底部で生成されたトピックであると考えられる。

同じ *это* を用いる構文として以下のようなものがロシア語にある。

(48) Это　φ　книга.
this-n.nom. be-pr. book-nom.
「これは本だ。」

(49) Это　была　школа.
this-n.nom. be-f.pa. school-f.nom.
「これは学校だった。」

この構文，一見して2.2.2.で扱ったいわゆる連結動詞構文に類似している。

(50)(=30) Я　φ　студент.
I-nom. be-pr. student-nom.
「私は学生だ。」

すなわち，どちらも2つの主格名詞句をつなぐように間に *быть* があるからである。それ故，当然のことながら，多くの文献に両者を同一視する記述が見られる。例えば，山崎（1990）は両者を同じNN型として分類しているし，Barnetová et al (1979) も同じタイプとしてあげている。しかしながら，両者は同じものであるとは考えられない理由がある。

先ず第一に，*быть* の一致する対象が異なる。(49)で明らかなように，この構文では一致対象は主語のように見える *это* ではなく，述語のように見える *школа* である。この構文では *быть* が *это* に一致することはない。それに対して，前節で扱った連結動詞構文では一致する対象は第1名詞句である。

(51) Он　был　свободная　птица.
he-nom. be-m.pa. free-f.nom. bird-f.nom.
「彼は自由な鳥だった。」[12]

---

[12] 2.2.2.で触れたように現代ロシア語では現在時制以外で第2名詞句が主格を与えられることは少なくなっており，匹田の調査ではほぼ全ての第2名詞句の主格

次に，第2名詞句の格の問題がある。2.2.2.でも触れたが，現代ロシア語では主格第2名詞句を持つ連結動詞構文は現在時制以外ますます用いられなくなっている。匹田が行った調査ではほぼ全ての主格第2名詞句が非文との判断を頂戴している。それに対してこの *это* を第1名詞句とする構文では第2名詞句が主格になるのが原則である。また，変化の兆しが見えるようにも考えられない。この点においても両者は食い違いを見せる。

第3点は否定の小詞 *не* が現れる位置が異なることである。

(52) Это была не Наташа.
this-n.nom. be-f.pa. not Nataša-nom.
「これはナターシャではなかった。」

(53) Лингвистика не есть увлечение.
linguistics-nom. not be-pr. pleasure-nom.
「言語学は遊びではない。」

ここから明らかなように，*это* の構文(52)では否定の小詞 *не* が *быть* の後ろに置かれているのに対して，連結動詞構文の場合(53)それは *быть* の前に置かれている。ここでも両者は異なる特徴を示している。

匹田(1996)ではこの構文は形式題の *это* が名詞文(номинативное предложение)を先導しているものであると結論づけた[13]。名詞文とは必須項としての主格名詞句とそれに形態的に一致する *быть* からなるものであり，意味的には述語的に解釈される[14]。

(54) ϕ Весна.
be-pr. spring-f.nom.
「春だ。」

が非文であるとの判断を頂戴した。しかし，быть の現在形は人称・性・数などの特徴による一致を一切行わないのでここでの例としては不適切である。そこで，ここで示した例文は Barnetová et al (1979) からの引用である。匹田の調査では非文の判断が下っていることを念のためお断りしておく。

[13] 山崎 (1990) もどちらも同じ「形式題」であるとしている。ただし，残念ながら理由は示していない。

[14] 名詞文は存在文とは異なる。存在文とは意味的のみならず形式的にも多くの違いがある。詳しくは匹田 (1996) を参照。

(55) Была весна.
be-f.pa. spring-f.nom.
「春だった。」

まず (48, 49) の *это* を形式題のそれと結びつける理由の一つはどちらの *это* も動詞と一致しないと言う点である。形式題の *это* は後続する文の中に主語が存在しそちらが一致するわけだから，一致しようがない。また(48, 49) における *это* が *быть* と一致しないことは上ですでに述べた。

2点目として，どちらの *это* も機能的に見ると同様にトピックとして機能しており，語順に関して課せられている制限も類似している。例えば，どちらも節頭の位置に限定されている[15]。

(56)

(a) Это Таня.
this-n.nom. Tanja-nom.
「これはターニャだ。」

(b) *Таня это.

(57)

(a) Это птицы летят.
this-n.nom. bird-pl.nom. fly-3.pl.pr.
「それは鳥が飛んでいるのだ。」

(b) *Птицы это летят.

(c) *Летят это птицы.

(d) *Птицы летят это.

(e) *Летят птицы это.

(f) Это летят птицы.

しかし，その一方でどちらの場合も前に疑問詞，文副詞等は置くことが許される。

---

[15] 連結動詞構文では第1名詞句と第2名詞句の位置を交代させることができた。(56b)が非文であることは主格第2名詞句を持つ連結動詞構文とこの構文が違うものと考えるもう一つの理由となる。

(58) Кто это пришел?
who-nom. this-n.nom. come.m.pa.
「来たのは誰だ？」

(56) Кто это?
who-nom. this-n.nom.
「これは誰だ？」

(60) Естественно, это птицы летят.
naturally this-n.nom. bird-n.nom. fly-3.pl.pr.
「当然，鳥が飛んでいるのだ。」

(61) Конечно, это Наташа.
of course this-n.nom. Nataša-nom.
「もちろん，これはナターシャだ。」

また，どちらも従属節の中に現れることができるが，関係節には現れることができない。

(62) Я знаю, что это нашу книгу они читают.
I know that this-n.nom. our-acc. book-acc. they-nom. read-3.pl.pr.
「彼らが読んでいるのは我々の本だと言うことを私は知っている。」

(63) Я знаю, что это школа.
I know that this-n.nom. school-nom.
「これは学校だと私は知っている。」

(64) *Вот идет профессор, который это кафедрой русского языка хорошо руководит.
here go-3.sg.pr. professor-nom. who-nom. this-n.nom. chair-ins. Russian-gen. language-gen. well lead-3.pl.pr.
「*うまく指導しているのがロシア語講座である教授が歩いている。」

(65) *Я очень интересовался книгой, которая была это.
I-nom. very be interested-pa. book-ins. which-nom. be-f.pa. this-n.nom.
「*私はこれである本に大変興味がある。」

次に，(48, 49)の *это* が先導しているものが名詞文であると考える理由として，1点目として，*быть* に後続する主格名詞句がどちらの場合も *быть* に

一致を引き起こす。この点においていずれの主格名詞句も「主語的」であると考えられるが，意味的にはいずれの場合も「述語的」である。であるからこそ，一般に *это* は連結動詞構文の第1名詞句と同一視されているわけであるが，また逆に，であるからこそ，この *это* は名詞文を先導する形式題であると考える理由になるのである。

また，(52)で示したように，*это* ではじまる構文は(53)のような連結動詞構文と否定の小詞 *не* が置かれる位置が異なった。このことはこれらが異なるものであることを論じるに当たって，根拠の一つとなった。

(66)(=52)　Это　была　не　Наташа.
this-n.nom. be-f.pa. not Nataša-nom.
「これはナターシャではなかった。」

(67)(=53)　Лингвистика　не　есть　увлечение.
linguistics-nom. not be-pr. pleasure-nom.
「言語学は遊びではない。」

名詞文の場合，否定の小詞 *не* の置かれる位置はまさに(66=52)と同じパターンを示す。

(68)　Была　не　весна.
be-pa. not spring-nom.
「春ではなかった。」

このことは *это* は名詞文を先導しているという議論を指示する強力な根拠となるであろう。

3．終わりに

現実的文分節の理論はロシア語の統語論，とりわけ語順の問題に新たな視点を与えた。しかし，その理論は機能主義的なもので形式的な観点からの分析は十分とは言えない。また，その分析手段は分類論的なものが主で，具体例の裏に隠された規則性を発見に対する志向も不十分である。

また現実的文分節ではトピックは基本的に一種類のものしか想定していない。文の要素は形式的文分節のレベルにおいて文法構造に従って生み出され

る。それは本来的には談話上の機能とは無関係であるが，現実的文分節のレベルで移動することによって初めてトピックになり，それによって「自由な語順」の変異が生じる。現実的文分節の理論はこの1種類のトピックだけを説明しようとしている。

しかし，形式的な視点から考察・分析を加えるとトピックはこのような「自由な語順」を説明するためのものだけではないことが明らかになった。それは移動によらず基底部で最初からトピックとして生成される，いわば本来的なトピックとでも言うべきものである。別の表現をするならば，これらはいずれも形式的文分節によって機能的文分節が表現されているものであると言えよう。

本稿ではこのようなタイプのトピック構造3つに関して議論した。それらは左方転移化要素，主格第2名詞句を持つ連結動詞構文の主格の第1名詞句，形式題の *эmo* の3種類である。これらは相互に差異も多く認められるが，共通する特徴もある。例えば，かき混ぜによるトピック構造には「トピックがフォーカスに先行する」という原則に従わない例もある。これは「表出的に色づけられたことば」に見られる「主観的な」語順と呼ばれるが，ここで論じた基底部で生成されたトピックはこのような原則に従わないものは存在できない。このような類似性からこれら3つのトピックが1つのものにまとめられうるのかそうでないのか明らかにすることは今後の重要な課題の一つである。

参考文献

Babby, L. (1980) *Existential Sentences and Negation in Russian, Karoma*, Ann Arbor.

——— (1986) "The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory and Russian", in R.D. Brecht and J. S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Slavica, Columbus.

Barnetová, V. et al (1979) *Русская грамматика*, в 2 тт., Academia, Praha.

Chomsky, N. (1977) "On Wh-movement", in Culicover et al (eds.) *Formal Syntax*, Academic Press, New York.

——— (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordecht.

——— (1983) "A Minimalist Program for Linguistic Theory", in K. Hale & S.J. Keyser (eds.) *The View from Building 20*, The MIT Press, Mass.

——— (1985) *The Minimalist Program*, The MIT Press, Mass.

——— (1986) *Knowledge of Language: Its Nature*, Origin, and Use, Praeger, New York.

Comrie, B. (1973) "Clause Structure and Movement Constraints in Russian", in Corum, Smith-Stark & Weiser (eds.) *You Take the High Node and I'll Take the Low Node*, CLS.

Comrie, B., G. Stone, M. Polinsky (1996) *The Russian Language in the 20th Century*, OUP, Oxford.

Daneš, F. (1972) "Order of Elements and Sentence Intonation", in D. Bolinger (ed.) *Intonation*, Penguin Books, Middlesex.

Hikita, G. (1992) "Extraposition of Elements Out of Some Syntactic Categories in Russian", *Gengo Kenkyu*, vol. 102.

Mathesius, V. (1947) "O tak zvaném aktuálním členení větném", in *Čeština a obecny jazykozpyt*, Praha. (first appeared in Slovo a *slovesnost, 5*, 1939)

Адамец, П. (1966) *Порядок слов в современном русском языке*, Academia, Praha.

Виноградов, В.В. (1960) *Грамматика русского языка*, т.2-1, Издательство Академии Наук СССР, Москва.

Земская, Е.А. (1973) "Наблюдения над синтагматикой разговорной речи", Е.

А. Земская (ред.) *Русская разговорная речь*, Наука, Москва.

Иванов, В.В. (1983) *Историческая грамматика русского языка*, Просвещение, Москва.

Исаченко, А.В. (1966) “О грамматическом порядке слов”, *Вопросы языкознания*, № 6.

Ковалевская, Е.Г. (1992) *История русского литературного языка*, Просвещение, Москва.

Ковтунова, И.И. (1976) *Современный русский язык: порядок слов и актуальное членение предложения*, Просвещение, Москва.

Кохтев, Н.Н. и Д.Э. Розенталь (1984) *Популярная стилистика русского языка*, Русский язык, Москва.

Крылова, О.А. и С.А. Хавронина (1984) *Порядок слов в русском языке*, издание 2-е, исправленное и дополненное, Русский язык, Москва.

匹田　剛 (1993)「ロシア語における2つの統語的トピックについて」,『人文研究』, 第86輯, 小樽商科大学。

――― (1995)「ロシア語における主語・動詞の一致と主格の付与をめぐって」『人文研究』, 第89輯, 小樽商科大学。

――― (1996)「ロシア語における連結動詞と主格名詞句を先導するэтоをめぐって」,『人文研究』, 第91輯, 小樽商科大学。

――― (1998)「ロシア語の主格名詞句をめぐって」,『人文研究』, 第95輯, 小樽商科大学。

――― (1999)「ロシア語のいわゆる連結動詞現在形の特殊性について」,『人文研究』, 第97輯, 小樽商科大学。

松本克己 (1987)「語順のタイプとその地理的分布―語順の類型論的研究：そのⅠ―」,『文芸言語研究　言語編』, 12, 筑波大学。

山崎紀美子 (1990)『ロシア語の構文』, くろしお出版, 東京。